

# 小学校での担任教師からみた「気がかりな子」 に対する対応についての研究

インタビュー手法を中心に

永 井 悟

(愛媛県北宇和郡広見町立好藤小学校)

相 模 健 人

(臨床心理学研究室)

(平成15年5月22日受理)

## Study Concerning Responses from the Perspective of Elementary School Home-Room Teachers on Potentially Problematic Children : With a Focus on the Interviewing Method

Satoru NAGAI and Takehito SAGAMI

### 1 問題の設定

近年、学校現場では、「不登校」、「いじめ」、「学級崩壊」といった様々な教育問題が発生している。「不登校」に関しては、平成12年度の文部科学省の調査によると不登校児童生徒数は、134,282人と調査開始以来最多を記録した<sup>(5)</sup>。この他にも、青少年の触法行為・暴力事件といった問題も深刻化しており、教育現場ではこれらの問題への対応策を試行錯誤している状況にある。

さて、一般に児童生徒の「問題行動」については様々なとらえ方がある。その中でも平田(1989)<sup>2)</sup>は、学校現場にみられる児童生徒の「問題行動」を、個性の表出、発達過程における逸脱行動、内在している不安感情の表出という考え方を重視した上で、教育的観点から①「非社会的行動」、②「反社会的行動」、③「神経的習癖・心身症など」、④「その他」と分類している。この平田の分類をみても、児童生徒の「問題行動」にかかれた意味には違いがあり、さらに表出の仕方は千差万別であることがわかる。また、当然のことながら、その対応も多様であり、それぞれの児童生徒の状況を正しく理解した上での判断が必要となってくるのだ。

では、学校において児童生徒を正しく理解するために注目しなければならないことは何か。

筆者らは、子どもたちが学校生活のほとんどを学級という集団の中で過ごしていることに着目し、その学級において非常に大きな影響力をもつ担任教師の対応に焦点をあてることにした。小学校における担任教師の児童理解および「問題行動」の早期発見・早期対応が、様々な問題解決の糸口となる可能性が大きいと筆者らは考えたのである。

これまで「問題行動」の多くが中学校以降に顕在化してきたため、中学校・高校での対応に関する研究は盛んに行われてきた。しかし、昨今の「問題行動」の深刻化などにより、小学校での対応も重要となってきた。

ただ、現実問題として、教師の多くは秦(1991)<sup>1)</sup>や久富(1988)<sup>4)</sup>が指摘しているように多忙という問題に悩まされている。早期発見・早期対応の重要性は認識しながらも、顕在化した「問題行動」への対応に追われる状況は否めず、その一方で、今後何らかの問題にかかわってくるのではないだろうかと思慮する子どもがいる。いわゆる「気がかりな子」の存在である。もし、担任教師が「気がかり」になった段階で、適切な対応を行えば多くの「問題行動」は予防もしくは早期発見・早期対応が可能であると考えた。

では、「気がかりな子」をどのようにとらえればよいだろうか。鶴養(1989)<sup>7)</sup>は教師にとっての「気がかりな子」とは「他の子どもとの比較」「今までの子どもとの関わりの経験」を物差しに、特定の子どもの判断し、その基準に当てはまらない子どもを「気がかりな子」と判断することが多いと述べている。また、小林(1989)<sup>3)</sup>は「気がかりな子」とは「悪いことになるのではないかと不安にさせる子」と述べている。ここで共通していることは、どちらの説においても教師個人の判断が大きく影響するという点である。現実として経験や学校内での役割などによってもその判断は大きく左右されるだろう。また、学校全体が抱えている問題によっても対応の優先順位が決定されることがあり、担任教師の問題行動のとらえ方に影響を与えることも考えられる。したがって、担任教師は置かれている状況によって子どもたちのとらえ方にも変化が生じることが予想されるのである。

そこで本研究では、これらのことをふまえて、小学校における「気がかりな子」を「フォーマルグループである学級において、どちらかという目に見える非行・不登校等といった特別な問題があるというわけではないが、無気力で他の子どもと関わらず、友人との人間関係づくりに積極性に欠けるなど、担任教師から見て、将来『問題行動』が引き起こされる可能性が予測される児童」と定義して、小学校での担任教師の「気がかりな子」への対応を調査した。

## 2 目 的

- 1 担任教師から見た「気がかりな子」を前述のように定義し、小学校における対応事例を複数の学級担任経験者からインタビューすることにより、様々な立場の担任教師の「問題のとらえ方」に影響を与えた要因を探る。さらには、担任教師の「問題のとらえ方」に影響を与えた要因の共通点・相違点を見出す。
- 2 様々な事例から、「気がかりな子」に対する効果的な対応策や担任による対応の限界を考察し、現在、子どもたちが抱えている様々な問題に対する早期発見・早期対応への糸口を探る。また、担任教師を支える協力体制の在り方や必要性について明らかにする。

### 3 方 法

#### (1) アンケートによる実態調査

調査時期と方法	2002年7月～8月 県市・市の小学校へ訪問，アンケート配布。 各小学校で実施後，後日回収。
調査対象	小学校担任経験者教師（非常勤講師を含む）120名 （配布150・有効回答80.0%）
調査内容	研究目的に沿って筆者らが独自に作成。
結果処理	項目毎の度数分布集計及びクロス集計を実施。「教育観に関する質問」における自由記述は共通する内容を抽出。

#### (2) インタビュー調査

調査時期と方法	2002年8月～10月 県市・市の小学校へ訪問，実施。
調査対象	アンケート結果より抽出した小学校担任経験者教師11名
調査内容	坂下（1998） <sup>6）</sup> の「聞き取り調査の手引き」を参考に，研究目的に沿って筆者らが独自に作成。
結果処理	録音記録からインタビュー項目に沿って逐語録を作成し，若干の考察を加え，結果とした。

### 4 結果と考察

#### (1) アンケートによる実態調査

実態調査の結果，本研究で定義した「気がかりな子」との出会いを85%もの教師が経験していた。そのうちの80%の教師は，1学期当初に「気がかりな子」と出会っている結果をみると，ほとんどの担任教師が，学級内に「気がかりな子」を抱えながら教育活動を行っていると考えられる。

そのとらえ方には，担任教師を取り巻く様々な状況が影響を与えていると思われるが，図1にあるように「孤立している子」や「わがままな子」を「気がかりな子」とする教師が多数いたことは，担任教師の多くが，集団としてのまとまりを意識した学級経営を基本にしていると考えられる。担任教師は，子どもたち一人一人に目を向けようとしながらも，学級の集団としての機能維持に大きな労力を注いでいることが推測できる。

また，「気がかりな子」に対する対応については，図2より「個別指導」と「家庭との協力・連携」が効果的であるという結果が示された一方で，図3では，この2項目に対応の限界を感じている教師が多いという結果が出ている。これは，効果が期待できることは明らかなものの，実際に対応していく中で，この2つの項目に関連した様々な壁にぶつかっているという実情がうかがえる。

そして，「『気がかり』な行動を引き起こした要因」（図4参照）の調査結果において，「学級の雰囲気」や「教師の働きかけ」といった学校内での要因ではなく，「家庭環境」

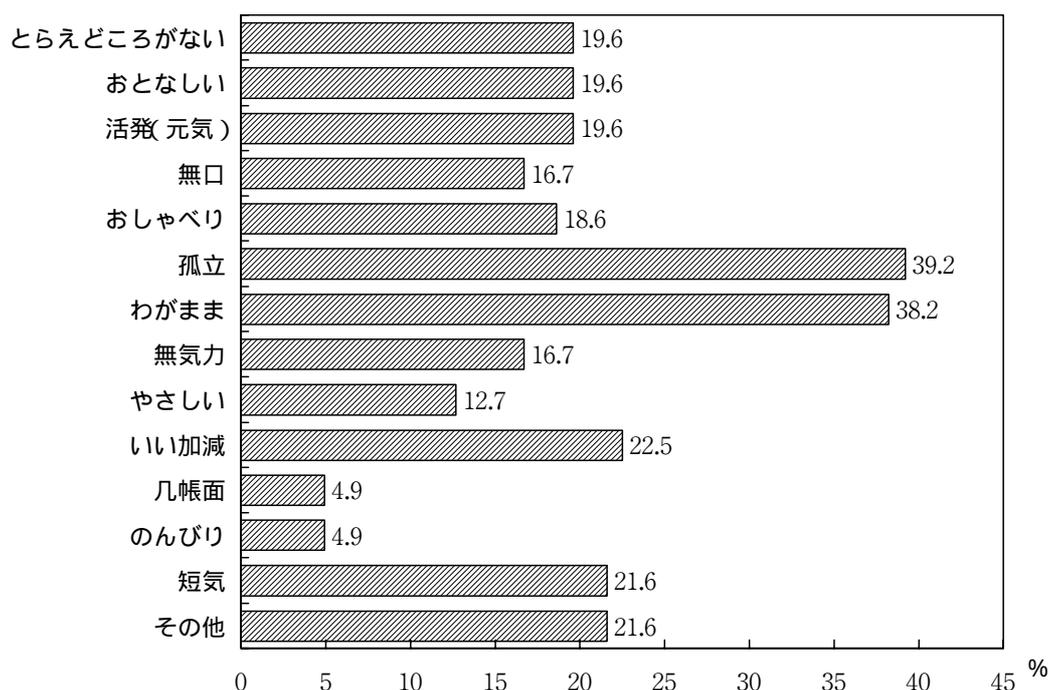


図1 「気がかりな子」のとらえ方

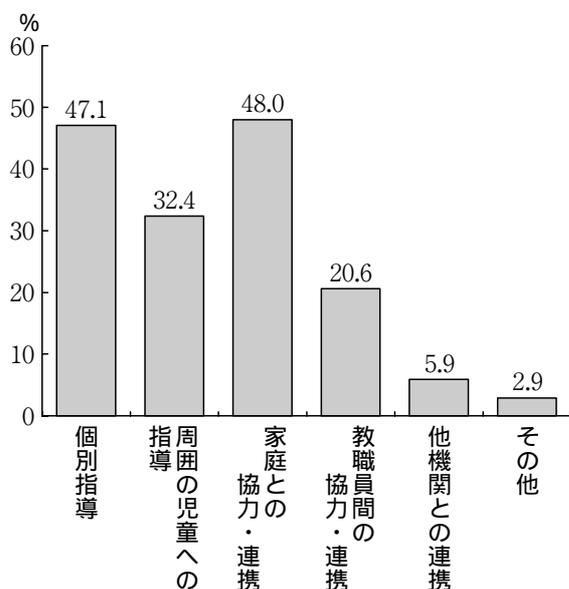


図2 「気がかりな子」への効果的な対応

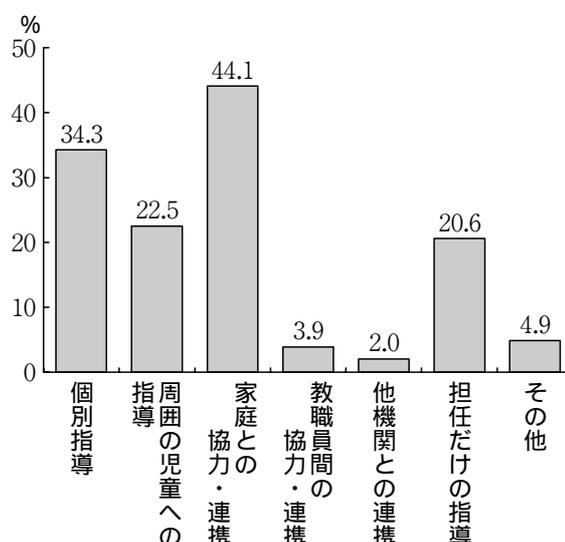


図3 「気がかりな子」への対応での限界

や「本人の性格」を選択した教師の割合が高くなっているのは、この2つの要因が、担任教師が「気がかりな子」の対応にあたる中で感じた壁だったのではないかと筆者らは考える。これは、自由記述項目の「現在の子どもたちの課題」の中にも「忍耐力・根気強さの欠如」、「自己中心的」、「思いやりの欠如」といった「本人の性格」と関連すると思われる記述や、「家庭環境の問題」といった記述で表現されていた。

その後の「気がかりな子」の変容(図5参照)をみると、38.2%が「変化なし」という

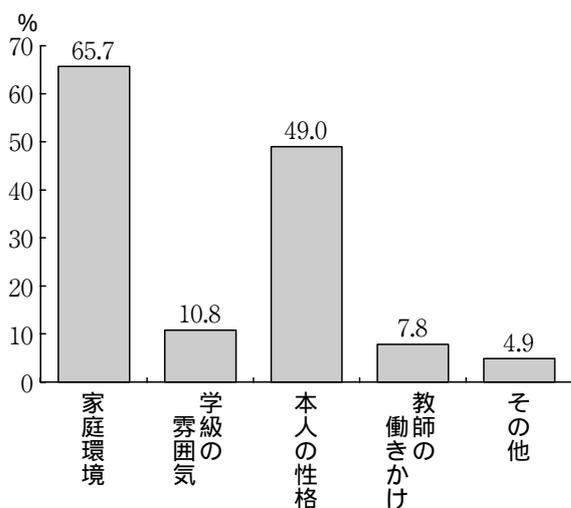


図4 「気がかり」な行動を引き起こした要因

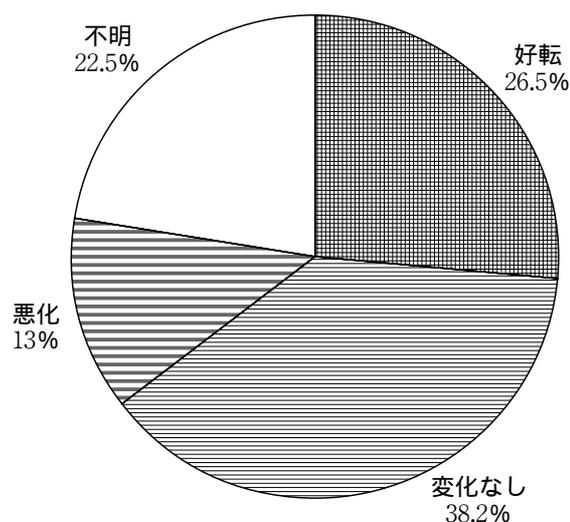


図5 「気がかりな子」のその後の変容

結果がある。この点については2通りのとらえ方がある。一つは、担任教師の対応に効果がなかったというとらえ方であり、もう一つは、担任教師が対応した結果として悪化しなかったというとらえ方である。前者のとらえ方をした場合、担任教師の対応が不十分であったり、適切でなかったりした可能性が推測される。また、後者のとらえ方に沿うならば、早期発見・早期対応の結果、「問題行動」として顕在化しなかったといえるのではないだろうか。しかしながら、教育現場において、後者のようなとらえ方によって「変化なし」を評価する考え方は、まだまだ少ないと考える。このとらえ方自体が、現在の教育現場に必要な考え方ではないかと筆者らは考えるのである。

こうしてみると、担任教師は学級の集団としての機能維持のために、「気がかりな子」に対して、その行動が好転することを期待しながら対応にあたっているものの、十分な成果を得たと感じている担任教師は少ないようであり、苦悩している教師の実像が浮かび上がってくる。

## (2) インタビュー調査

インタビュー調査によって得られた11事例は以下の表1の通りである。ここでは、その中でも「気がかりな子」に対する効果的な対応を提示していた、H子の事例を取り上げる。ただし、内容については、プライバシー保護のため一部改編している。

**事例概要** (以下、「」は担任教師のインタビュー内容よりの抜粋)

小学6年生H子は、前年度から登校班で通学せず、4月初も、1・2時間目が終わった頃に遅刻してくることが多かったため、担任教師(30代・男性)が、朝、迎えに行っていた。また、同級生との交流もほとんどなかったようである。

担任教師は、H子の負けん気の強さを長所としてとらえ、掃除場所の班長や縦割り班での活動の世話など、H子に役割を与えて人から頼られているということを感じさせるように指導した。

その結果、低学年からは「お姉ちゃん」と慕われ、交流の場が広がり、2学期の後半からは、担任教師の迎えがなくなるとも午前8時までに登校するようになった。

表1 インタビュー調査対象一覧

番号	対象児童	担任年代・性別	気がかりとなった主な要因
1	2年・A男	30代・男性	生活リズムの乱れから欠席が目立つ
2	3年・B男	30代・女性	家庭生活における継母との親子関係
3	3年・C子	30代・男性	運動会の練習が始まり遅刻が目立つ
4	4年・D男	50代・女性	友達の言葉に過剰な反応を示す
5	5年・E男	20代・女性	カッとしたりやすく、一人遊びが多い
6	5年・F子	30代・女性	部活の人間関係をめぐるグループづくり
7	5年・G男	30代・女性	動作が遅く、疎外されている
8	6年・H子	30代・男性	登校班での登校ができず、遅刻が多い
9	6年・I子	40代・男性	身体的発達の心配に加え、同年代と遊べない
10	6年・J子	30代・女性	人前になると話せない
11	6年・K子	40代・女性	提出物の遅れと保護者との関係

## 事例の考察

### 【担任教師の「問題のとらえ方」について】

本事例の担任教師は、前年度からの引継ぎから、4月当初のH子の課題は、登校班で通学ができず遅刻が続いていることと、同級生との交流が難しいことの2点を挙げていた。加えて、H子の家庭環境について、「母親しかいないので、家庭で、学校であったこととか自分のしたことを聞いてくれる人がいない」と表現し、H子に「心寂しさ」を感じている。また、母親に対しては、「お母さんとしての立場とか役割ができない人」という表現がされていた。これらのことが、H子の「気がかり」な行動を引き起こした主な要因の一つとして「家庭でのコミュニケーション不足」を指摘したことに繋がっていると考える。

また、この担任教師は、最初に「気がかりな子」とは、「集団の中に入り込めないような子とか、いつも教員に話しかけてくる子」と表現していたが、このH子が「こちら（担任教師）から話しかけなくてもH子からどんどん話しかけてきた」ことも「気がかり」となっていたと推測される。

この他にも、H子の学力について、九九でつまずいていたこともあり、「6年生という学年でいうと難しい」という表現で問題の一つと考えていたようである。

### 【本事例における効果的な対応と担任による対応の限界】

本事例の担任教師は、問題を抱えていると考えていた家庭環境への働きかけよりも、担任として学校でできることを中心に対応していったことは注目すべきである。家庭で話を聞いてもらえない実情を知った上で、学校で話しかけてきたら最後まで話を聞くように心がけたことなどは、具体的な対応例といえよう。ただし、この担任教師がH子にかかわれる時間を確保できたことは、校内の協力体制が整っていたことが大きく影響していると考えられる。

また、往々にして「負けん気が強い」という特徴は短所としてとらえられやすい。だが、H子の「負けん気の強いところ」を長所としてとらえ、指導に生かしている点などは、発想の転換による対応であり、この発想の転換がH子の課題解決に大きく役立ったと推測される。縦割り班活動や掃除の班長など高学年としての立場を実感させる場

の設定に努めたことは、H子の長所を生かそうとする担任教師の考え方が反映されている対応と考える。

一方で、限界については、「家庭生活に踏み込むこと」をこの担任教師も指摘している。各家庭の事情が複雑化している中では、担任教師として踏み込める部分は限られているといえる。

## 5 総合考察

本研究の調査結果をもとに、まず、目的1「担任教師の『問題のとらえ方』に影響を与えた要因を探り、その共通点・相違点を見出す」の検証を行う。

担任教師の「気がかりな子」のとらえ方に影響を与えたと考えられるものとして、①教師としての経験、②保護者に対する対人認知（仮称）、③前担任教師の「問題のとらえ方」が考えられる。①については、アンケートによる実態調査で教員経験年数による特徴が表れていたのに加え、F子の事例では、担任教師の教職を志した理由の影響もうかがえた。また、②については、帰宅後の家庭生活に担任教師が不安を感じていたB男、C子の事例や、担任教師と保護者の教育観の違いが明らかであったF子の事例などから推測された。③については、インタビュー調査した11事例のうち、10事例で何らかの形で前担任教師からの引継ぎを受け、さらに、そのうちの7事例の担任教師が「気がかりな子」への対応での悩みを前担任教師に相談していることから、その影響の大きさを感じた。この背景には、教師の「多忙」も影響しているのではないかと筆者らは考える。

ただ、②の影響に関しては、推論の域を脱することはできず、さらなる調査研究が必要であると考えられる。また、実際の学校現場は、さらに複雑な状況にあると推測される。特に、今回扱った事例のうち、「気がかりな子」の行動の原因が学校生活にあると感じていた担任教師はG男、H子、K子の3事例のみであった。今回の調査は、小学校の担任教師が対象であり、学校側の立場であったが、もう一方の子どもたちや保護者の立場から、担任教師の対応に関しての調査をする必要性を感じる。

次に、目的2「『気がかりな子』に対する効果的な対応策や担任による対応の限界を考察し、現在、子どもたちが抱えている様々な問題に対する早期発見・早期対応への糸口を探る。また、担任教師を支える協力体制の在り方や必要性について明らかにする」の検証を行う。

「気がかりな子」に対する効果的な対応については①活躍の場の設定、②あせらず待つ姿勢、③翌年度の学級編成という3点を見出した。

①の具体的な例として、全校放送で気持ちのよいあいさつができることと紹介されたことによって自信をつけたD男の事例や、社会科の発表を賞賛したことから担任教師との関係に変化がみられたF子の事例が挙げられる。また、②については、人前でしゃべることが苦手なJ子に対して決して強要せずに見守った担任教師の対応からもその重要性が認められた。そして、③については、D男、F子、G男のように、学級編成によって「気がかり」な行動が解消していった事例があった。

しかし、ここで忘れてはならないことは、どの対応においても、H子の担任教師のように経験や周囲の環境に影響されない柔軟な発想をもとにした児童理解が重要であるということである。この児童理解こそが、現在、子どもたちの抱える様々な問題に対する早期発見・早期対

応の糸口となると筆者らは考える。

最後に、「気がかりな子」への対応での担任教師の限界として、①家庭へのかかわり方、②専門機関との連携のあり方、③学習面でのサポートの3点があげられた。

①については、保護者の夫婦間の問題が影響していたと思われるB男の事例や保護者の担任教師に対する不信感によって子どもの学校生活に変化を与えてしまったK子の事例がある。また、②に関しては、E男やI子のように器質的な問題が推測される事例で、専門機関設置の地域間格差という問題も含め、専門機関への相談に至っていないという問題点を指摘した。そして③については、11事例のうち9事例において「気がかりな子」の学習面での課題を指摘していた。これらの限界を解消していくには、家庭生活でのサポート体制の整備や、スクールカウンセラー及び教員の適正配置が必要であろう。

## 6 まとめと今後の課題

本研究では、小学校での担任教師からみた「気がかりな子」に対する対応を、インタビュー調査を中心にして考察してきたが、現在の児童生徒の「問題行動」への早期発見・早期対応には、H子の担任教師のような経験や周囲の環境に影響されない柔軟な発想による児童理解をもとに「気がかりな子」に対して対応することが効果的であると筆者らは考えるに至った。

今後の課題としては、①保護者に対する対人認知（仮称）の影響の調査研究、②子どもや保護者の立場からの担任教師の対応についての調査研究、③各専門機関を含めた協力体制のあり方についての調査研究といった研究の必要性があげられる。

### （付記）

本論文は、愛媛大学大学院教育学研究科修士論文（2002年度）を加筆修正してまとめたものです。本研究をすすめるにあたって、アンケート及びインタビューにご協力をいただいた小学校教職員の皆様に心から感謝いたします。

### 引用文献

- (1) 秦 政春 1991 教師のストレス - 「教育ストレス」に関する調査研究 (I) - 福岡教育大学紀要 40・4 79 - 146 .
- (2) 平田 慶子 1989 生徒指導とカウンセリング 詫摩武敏編 基礎心理学講座Ⅱ 基礎教育心理学 八千代出版 135 - 137 .
- (3) 小林 正幸 1989 「気がかりな子」発見のチェックポイント 児童心理 8月臨時増刊号 12 - 19 .
- (4) 久富 善之 1988 教員文化の社会学的研究 多賀出版 61 - 70 .
- (5) 文部科学省 2001 文部科学省統計情報  
文部科学省 HP [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/toukei/index.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/index.htm)
- (6) 坂下千江子 1998 青年期女子の家出とその心理 家出経験者に対する聞き取り調査を通して 鳴門教育大学大学院学校教育研究科修士論文
- (7) 鶴養 美昭 1989 「気がかりな子」とは何か - 「よい子」イメージを問う 児童心理 8月臨時増刊号 2 - 11 .